

奈津子と父の関係

牧草 泉

一

道の両脇の雑草は、ほとんど地面にひれ伏していた。紫がかった花びらはしおれ始めていた。厳しい暑さに草花も生気を失いかけている。雨が少なかったからだろう。

墓地の上って行く山道の曲がり角で、花の群れを見つけた敏弘は立ち止まると数本手折った。

「姉さん、この花、ちよつと見てよ。とても人工的に作り出すことができない色だよ」

彼は感じ入ったように言う。姉の後を追うように足を早めた。

道の脇にぼつんと置かれた父の墓石も日に焼けたのか赤茶けていた。奈津子が父の墓石に線香を立てている間、敏弘は手にした野草の花束を墓前に供えた。あれほど日に照らされながら花束の茎には水滴が点々とついている。夜露がまだ残っていたのだろうか。敏弘は土の保水性を改めて確認した。

「昨日は晴れていたのに。草むらに囲まれていて水分が逃げていかないのだろうね」敏弘は独り言のように言った。

「姉さん、野草の花を手折るなんて、そんなことしちゃう駄目

だって、お父さんが言わないかね？」

竹の筒に挿した数本の花が傾いたのを立て直しながら、敏弘は姉を見上げた。

「亡くなった人に何が分かるのよ。お墓参りは私たちの単なる自己満足でしかないのよ」

奈津子にはお墓参りは生き残った者の単なる気慰みでしかないように思われたのだ。奈津子にとつて人間の生と死は、激しい騒音とそのあとにくる静寂だった。ふと奈津子は思った。「今のセリフは父の口から出てもおかしくないのではないか？」と。

奈津子は生前の父を思い出していた。体格では人に威圧感を与えるのに、心は真つ正直な父の顔が浮かんで消えた。

それでいて、いつも背中に孤独感を漂わせていた父。

父が亡くなって年月を重ねるにしたがつて墓参りの回数も減っていった。今では年に一回だけになってしまっている。

でも、忘れ去られていく過去でありながら、ふと生活の中で孤独を感じるとき、あるいは心の不安が生じたとき、一番心が安らぐのは、やはり父の墓所だった。墓石の前に立つと、あわただしい時間の流れが緩やかになった。墓所には心の安らぎがあった。

敏弘が大声で笑いながら奈津子に言った。

「姉さん、ようやく四十歳を超えたんだよね。後姿は老人の風格が出ているよ。隣の家にいたじゃないか、おしゃべりのお婆ちゃんが。姉さんの語り口もお婆ちゃんそっくりだよ」

「そんなに老けてはいないわよ」

奈津子は彼をにらみつけると言った。

もうこれ以上生きていくことができないような絶望感が押し寄せるたびに、奈津子は何度か一人でこの墓所を訪れた。弟がこのことを知れば笑うことができないはずだ。生き残った

ものの一時の気慰みといいながら、なぜここまで自分は訪ねてきたのだろうか。墓前で立ち尽くしながら、「父の生き方には少なからず批判的だったのに、どうしてこんなに父のことが忘れられないのか？」と思うことがしばしばあった。

ずっと以前に、スナックの女性と関係があった夫とうわべだけの和解をした日に、ここに来た。墓所の周囲を狭めている雑草を抜きながら奈津子は墓石に向かっていろんな話をした。でも、父は何も答えてくれなかった。

父は奈津子をよく抱きしめてくれた。それは小学時代まで続いた。父の体からは男特有のにおいがした。でもそれは男子生徒のあの刺すような匂いとは異なり、柔らかさがあった。母は父が奈津子を抱きしめる姿を見て、「あなた、もう奈津子も年頃だから、抱くなんておかしいわよ」と言ったが、父は奈津子を手放そうとはしなかった。奈津子も父の手を逃れることはしなかった。あの時の母のあきれたような表情が時々浮かんでくる。

その日は風が吹いて冷たかった。聞いてほしい話を胸の中に畳み込んだ。奈津子は芝のはさまからぼつんぼつんと顔を出している小さな雑草を抜いた。雑草は数日も経たないうち

で地上へ地上へと顔を出す雑草がうらやましく思えた。

植物のこの本能はどこから来ているのだろうか。それは細胞核だろうか、あるいはその中にあるミトコンドリアなのだろうか？

ふと奈津子は高校時代の生物の教師を思い出した。その教師はいつも呪文のように言っていた、「ミトコンドリアの解明こそが、生命のからくりを解く鍵だ」と。彼の授業は面白かった。全く理系向きでなかった奈津子がいまでも生物の時間を思い出すことができるのは、ときどき進化論の話をしてくれたからだだった。

今でもアメリカでは進化論の授業を拒否している学校があると教えてくれたのも、彼だった。彼は言った、「時間的タイムを頭の中で想像できないと、神が自然と浮かんでくるんだ」生徒はみんなきょとんとしていた。しかし授業が終わると、それを理解したクラス委員の男の子は、得意げに解説して見せた。奈津子も彼に耳を傾けたが、あまり理解できなかった。その友人は「物質の衝突が長い時間をかけて連続して生じて、現在に至ったんだ」と言ったが、奈津子にはピンと来なかった。彼の解説に頷く友人がうらやましかった。

でもクリスチャンの友人は違った。彼女は言った。「進化論には整合性はあるといっても、これだけ多種多様な生物が地球上に存在することを説明しきれないと思うのよ」

「じゃあ、あなたは進化論を信じないの？」

「うん、これだけ複雑な世界は物理的現象では説明できないと思うのよ」

「それって、やはり神の存在があるっていうこと？」

「私はそう思う。あなたは私がクリスチャンだからだと思わ
でしょ？」

「うんそう思うよ。だって聖書には、そう書いてあるんでし
よ？」

「でも、私はクリスチャンでなかったとしても、創造主の存
在は信じると思うの。無機物質と時間だけで果たして意思を
有するこれほど多様で複雑な生き物が生じるのか、どうして
も信じるのができないの。それって確率としては限りなく
ゼロだと思うのよ」

「クリスチャンはみんな宇宙の創造主は神であるってことを
信じてるの？」

「これだけ科学が進歩発展してくると、創造主は神である
ということに内々疑問を持ち始める人も中にはいると思うわ。
でもね、カトリック系の人は殆ど信じていると思うわよ」

「プロテスタントではそうでもないというの？」

「そんなことはないわよ。いろんな派はあっても、創造主は
神であるということを全否定する人はいないわよ。ただ、神
が創造したのは何か？ あるいはどの段階までなのか？ と
いう点では今後諸説出てくる可能性はあるわね」

「じゃあ、イエス・キリストの復活はどうなの？ 神の存否
が議題に上がる前に、疑義の声が上がりそうだけど」

「それは言えるわね。あるカトリックの聖職者が、『イエス

の復活の真否についてはそれほど議論する必要はない。聖書
に書かれている通りを理解しておけばいい。それが聖書の整
合に有意義だ」と言って、内々批判を受けたそうだけど、こ
れらいろいろな奇跡については、時代が進むにつれて議論さ
れることになると思うわ。これはキリスト教に限らず、どの
宗教についても同じだと思う」

「（フィジカルなものからメタフィジカルなものへ）が宗教
だとすると、現在は（メタフィジカルなものからフィジカル
なものへ）に変わりつつあるんじゃない？」

「そうね。科学が主役に躍り出てきているからね。今後はキ
リスト教に限らずどの宗教も、その二者の両立点へと向かう
んだと思うわ」

「でも、そのカトリックの聖職者は、大胆なことを言ったわ
ね」

「そうね、だけど一般の人が入信しやすいようにという配慮
もあつたのではないかしら。一般の人は聖書に書かれた通り
の刑が執行されたのであれば、イエスが復活することはあり
えないというのが常識だろうから」

「そうね、入信しようとすれば、イエスの復活を信じなければ
ならない、ということになると、二の足を踏む人も出る可
能性もあると思うわ」

「そうよね、ここらあたりが宗教の社会性のあり方としては
難しいのよ」

「ところで、あなたはプロテスタントだけど、すべての世界
は、神の支配下にあると信じているの？」

「そこまでは思っていないわ。例えば、進化論の隔離説は信じてもいいわ、というより正しいと思うのよ」

「どうして？ あなたにしては変じゃない？」

「別に変じゃないわよ。クリスチャンだっていろんな考えを持つているんだから。進化論を信じている人もいるのよ。もちろん始原的には神の存在は信じているんだけど」

「隔離説をどうして信じるようになったの？」

「例えば、隠れキリシタンがあるじゃない？」

「あの九州の生月地方などに残っている隠れキリシタンのこと？」

「そうよ。禁教令が廃止になっても、隠れキリシタンは独自の教義を維持して、今でもどの派にも合流していないもの」

「じゃあ、キリスト教も地域によって色合いが異なってくるということ？」

「そうよ、その地域の政治や生活環境に影響を受けるのよ」

「じゃあ隠れキリシタンも、政治的、地域的環境の影響を受けて独自の進化・発展を遂げたということなのね」

「そういうことになるわね。特に隠れキリシタンは政治的・社会的弾圧を受けてきたからね」

「宗教も孤高を保つことは不可能だっていうこと？」

「結論はそうよ、キリスト教だって社会の中の組織体だから、社会の変遷に左右されるのよ。ましてや組織が巨大化すると環境との相互作用で大きく変化していくものなのよ」

「じゃあ、キリスト教の教義も時代によっていろいろな解釈が出てくることになるのね」

「そうよ、組織体が大きくなると直接政治とのかかわりあっても出てくる、というよりそうならざるを得ないのよ。これってキリスト教に限らないと思う」

「そういわれると、奈津子はそうかもしれないと思った。目の前に無機物の元素が散らばっている。これらの元素が果たして時間の経過とともに生き物へと変じていくのか？ 想像もつかなかった。やはり創造主がいるのではないのか？ 奈津子は、「教師の言う進化論も一つの仮説にすぎないのでは？」と思った。

*

「自分の自尊心を大切にするんだ。自尊心を誰かが傷つけようとするときは、命を懸けても戦うんだぞ」

父は酒を飲むと必ず奈津子たちに言い聞かせた。でも父の背中を見ると、いつも父は敗者に見えた。背中が曲がっているせいなのか、その足取りは奈津子を悲しくさせた。

母から弁当を作ってもらって自転車で出勤する父。運転手の生活は普通のサラリーマンと違って生活が不規則だった。夕刻から出て行く日もあれば、朝帰りの日もあった。数日間帰ってこないこともたびたびあった。

母が家を去ると、父は弁当づくりを自分でした。父は朝を問わず夜を問わず、出勤するときは必ず弁当を持っていった。奈津子は、弁当は昼に食べるものと思っていたので、この父の習慣は変に思えた。

父の遺言とも言うべきこの忠告を、果たして自分は実践してきたのか？ 奈津子には全く自信がなかった。いつも自尊

心を傷つけられるのを知りながら、それに我慢してきたような気がした。一番身近な夫の裏切り。別れたほうがいいと何度か思いながら、そのたびにじつと立ち止まって耐えてきた。我慢は戦うことと同じなのか？「それは戦いではない、敗北だ」と言う父の声が聞こえるようだった。自分の性格は父親には似ていないと思う。決然として自分の環境と戦うことができなかつた。子供のためにも、夫のためにもじつと我慢をして生きてきた自分がそこにいた。

一歩前進も一歩後退もできない人間。そんな人間に戦いなどあるはずはない。そんな思いがした。ではそんな性格は母からの遺伝なのか？奈津子は突然強く首を振った。母には秘めた決断力があつた。そうしてその決断力を行使して、一人で家を去つた。

自分にはそんな勇氣は微塵もない。心ではこれでは駄目なんだ、と思ひながら、それ以上の一歩が進めない自分が哀れに思えた。そうして何やかやと勝手に理由付けをして補償してその場をやり過ごす。今度の夫の背信でも同じことだった。奈津子は子供たちのために耐え忍んだ。耐えることは美德だ、と自分で思い込もうとした。しかし、本当は心の暗い闇に迷路のように伸びている優柔不断さのためではないのか。そう思うことがあつた。

*
奈津子は線香に火をつけると墓石の前にそと置いた。線香は燃え上がる青い煙の中で小さい蛍のように光を放つた。弟が竹の筒に差し込んだ花が生き返つて見えた。必死で水を

取り込んだのだろう。弟が墓石に酒を注いだ。酒は墓石を伝つて周囲に染みながら落ちていった。

奈津子が亡くなつた父との間に距離を置いて、涙を流すことなく墓所の前に座ることができるようになるまで何度も四季が通り過ぎて行つた。

奈津子は弟が注いでくれた酒を受け取ると墓前の台に供えて手を合わせた。弟が続いてお辞儀をした。二人で重箱の蓋に置いていた酒を一口ずつ飲み交わした。

「墓前で酒を飲むつて、変じゃないの？」弟が小さな紙コップを口にしながら言つた。

「構わないよ。こころあたりでは、慣習になつてゐるのよ。

おじいちゃんがなくなつたときも、お父さんはやはり墓石に酒を注いで、残りを口にしていたのを覚えてゐるの」と、言

いながら奈津子は飲みなれない酒の苦い味に身震ひした。奈津子は、祖父も酒好きだつたし、父もやはりそうだつた。お

そらく祖父の遺伝を色濃く受け継いでいたのだろうと思つた。

「お姉ちゃんが一人で来てくれたから、本当によかつたよ。お姉ちゃんが夫婦同伴で来ると、思つたことが話せないからね」敏弘はいたずらっぽく笑つた。「でも、お兄ちゃんがい

ないのがちよつとさびしいんだけど・・・」

「そうね、お兄ちゃんも電話したんだけど、急に手がはずせなくなつたつていうことだつたよ。二人でいいじゃないの。

私だつて、すこしは家事から逃れることができて心が和んでるのよ」

口の中が乾燥して別に食欲がわかなくなつたが、弟に勧めら

れるままに奈津子は箸をとった。

「お姉ちゃん、お父さんって、普通の人とは違ってたよね。そう思わない？」

敏弘が奈津子の同意を求めるように覗き込んだ。敏弘の心の奥に深くそして暗く沈んでいる重い記憶を想像して、奈津子はしばらく無言のままゆっくりと箸を動かした。

納棺の日は寒々とした風が吹いていた。父の遺骨を埋葬した日の光景は頭の中に張り付いた絵のようにはっきりと記憶に残っていた。三月の肌寒い春の気配と凍った地面の冷気が混ぜ合わさった細く曲がりくねった山道を登りながら、奈津子は小さい木の根に躓いても重心を失うほど前が見えなくなつて泣いた。でもなぜこんなに涙が出るのだろうか？ 今思うと自分でも不思議だった。あれほど父の生き方に不満を持っていたのに、と思つた。

二.

手術を前にして病床に横たわっていた父はときどき奈津子に冗談を言った。

「ここに来る人はね、見舞いをかねて、自分の生を確かめてるんだ。自分はまだ生き延びられるつてことをね。そう、自分の幸運を確認しているんだ」

「そんなことないわよ、お父さんの思い過ごしよ」

奈津子が抗議口調で答えると、父が話を遮った。

「お前は若いから気がつかないんだ。俺はね、ここで命を閉じることになりそうだ。でも、自分では悟りきつているつも

りでも、時々生への執着が湧き上がつてくることもあるんだ。そんな時はいらだたい思いがするね。誰でもこんなアンチノミーに苦しみながら人生を終えているんだろうね」

「・・・」

父の病名は脳腫瘍だった。父も主治医から告げられている。「そんなに悲観的な生き方って嫌よ。主治医の先生も治癒の可能性があるといつてたじゃない？」

奈津子は自分を励ますように父に言った。

奈津子は主治医の表情を思い出した。父の病状を初めて聞いたとき、動転した。腫瘍、しかも脳腫瘍。奈津子は主治医に頼んだ、父には内緒にしてほしいと。しかし医者首を横に振つた。

「今は病状を隠す時代じゃないんです。治療方法も進歩しましたからね。治る可能性、延命の可能性があれば治療すべきです。そのためには患者さん自身の協力が必要になってくるんです。特に生きようという意欲が治療の補助手段としても必須なんですよ」

「でも本人が先生からじきじきに病状を聞くよりは、知らないほうが精神的には楽じゃないかと思うんですが・・・」

「そういう事例がないとは言えませんが、長期の治療を必要とする場合、秘密を保つことは難しいですね。不可能ですよ。

仮に隠しても、治療のために、薬を投与しますし、放射線治療もします。診察もします。病名を隠して診察したり、患者さんと話をしたりすれば、私たちの表情も平静ではないです。患者さんにすぐに読み取られますよ。」

今は患者さんもうろいろ知識を持っている時代ですよ。葉だつてネットで調べれば、その病名を知ることができまさら。百パーセント隠し覆えませぬ。そうするとよほど無神経な人でない限り、患者さんは病名を知ることになります。

また、主治医が自分の病状を隠しているんじゃないか、という疑念の矛先は、直接主治医に返ってきます。医者としての信頼がなくなってしまうんです。そうなる治療に対して患者さんの協力が得られなくなるんですよ。物理的にも精神的にも、ですな」

「じゃあ治癒の可能性があるというんですか？」

「治癒させるためにいろいろ手を尽くすつもりですが、お父さんの場合はその可能性はかなり厳しいと思ってください」
奈津子は主治医の話に納得した。いや、納得せざるをえなかつたといつたほうがいいだろう。

*

*

母が家を出たのは奈津子が小学五年のときだつた。母は一人で家を出た。父と母の間でどんな話し合いがなされたのか、詳しいことは知らない。兄はある程度知っているようだが、尋ねても何も答えてくれなかつた。しかし母の消息は近所の人から時々漏れ出てきた。奈津子を直接呼び止めて教えてくれた人もいた。「あなたのお母さんね、再婚したんだつてね」。ある老婆はわざわざ奈津子を手招きして非難めいた口調で言った。

もちろん父と母の間が険悪になつていたことは気がついてた。しかしそれ以上のことはあまり分からなかつた。とい

うよりは、知りたくなかつたといつたほうがいいのかもしれない。父と母は子供の前ではめつたにいがみ合うようなことがほとんどなかつたからだ。

母は弟の敏弘だけは連れて行くことを望んだが、父が絶対に許さなかつた。弟も父と暮らすことを望んだ。

奈津子にとつても母が去ることはとても辛いことだつた。だから弟にとつてはなおさらのことだつたに違いない。母は「お母さんと一緒に暮らそうよ」とは一度も奈津子には言わなかつた。母の呼びかけがなかつたことで、一人取り残されたような思いにとらわれた。それでも、兄が父と一緒に暮らすことにしていることを知つて迷わず兄に従つた。

母が去るとその代わりを奈津子がした。もちろん近所に住んでいる父方の祖母がいつも来てくれた。奈津子が学校へ行つてるときは祖母が洗濯とか部屋の掃除などをしてくれた。奈津子は学校から戻つてくると、幼いながらも、祖母の助けを借りて家事を担当した。兄も時々手伝つたが、こまごまつたところまでは配慮できなかつた。

*

*

父がD会社の研究所を辞めたのは小学校二年のときだつた。父は運送会社のトラック運転手になつた。

あるとき夕食をとつているとき、母がポツリと言つた。

「お父さんね、会社を辞めるんだつて」

「どうして？」奈津子はびっくりして尋ねた。

「それは知らないよ。お父さんに聞いてみたんだけど、よく分からないのよ」

「辞めてどうするの？」弟が箸を止めて聞いた。

「新しい会社で働くんだって」

「どんな会社なの？」

「運送会社だって」

「運送会社？ 今の仕事と全然違うじゃん」弟が驚いたように声を上げた。

「理由はどうしてなの？」奈津子の問いに母の答えはいまいった。

「お母さんも何度か聞いたんだけど、わからない」母は肩を落としてうつむいた。

父は子供思いであつたことは十分に理解できた。しかし奈津子からすれば、父がトラックの運転手になつたことは、家庭の責任者としてはやはり義務の放棄をしたとしか思えなかつた。父の転職は家庭を限りなく不安定にした。特に母は大きなショックを受けたと思う。母は K 大と肩を並べる F 女子大学出身で、同じサークル活動の一年先輩として父を尊敬していた。しかし、父が会社を辞めてから、次第に母の言動は変わつていった。

三.

父の実家は小規模農家で経済的に貧しかった。父は定時制高校に通つた。そうして一浪後古い歴史を持つ K 大学の理系に進学した。定時制高校時代は石油スタンドのアルバイト、食堂の出前など何でも飛びついて働いた。大学も入学金だけは親から出してもらつて、あとの生活費は自分で稼いで卒業

した。

父はそんなことは子供にはあまり話さなかつた。時々奈津子たちが尋ねても話題をそらした。当時、日本は停滞期にあつて、概して生活水準の低い家庭が多かつた。だから、定時制に通う生徒も多かつた。中には優秀な生徒もいて、現役で T 大に合格する者もいた。だから父が特に優秀であつたといふことではない。しかし何かにとりつかれたように勉強に励んだらしい。これは近隣の語り草となつていた。

父は二年の理学修士課程を修了すると教授の紹介で大阪の有力企業の D 社に研究職として就職した。二年後、指導教授の強力な推薦もあり、郷里の近くにある研究都市の付属研究所に配転になつた。この研究所はたんばく質の研究で有名だつた。生命化学の分野では日本をリードしていた。母からすれば、父が大企業の研究職になつたということは、十分満足だつたと思う。

母が将来をどういう風に描いていたのかは分からない。それほど高い地位は望まなくても、父がそれなりの社会的地位を得るだろうという期待ははじめから持つていたはずである。母が例外的だということではないだろう。女性であれば、誰もが有する将来の設計だろうと思う。母が特に虚栄心が強かつたとか、夢想家だつたということではないだろう。しかし、その希望が絶たれたとき、母の動揺は自分を処しきれないほど大きかつたのだ。

「誰だつて、死は免れないんだ。運命と考えるほかないんだ。人生は生と死で成り立っているんだ」。夫はそう言つて奈津子を励ました。

そのときは、奈津子は亡くなつた父の代わりに夫が自分の人生のよりどころとなるだろうと固く信じた。しかし思惑は違つた。夫はあまり家庭を顧みなかつた。性格が社交的というか、華やかというか、家庭を守る気概にかけていた。結婚前からある程度は分かつていたことだつたが、家庭をもてば落ち着くだろうと思つていた。事実義母も、そんなことを言つて奈津子を安心させた。

夫は会社の営業部の中堅として上司から信頼されていた。また実績も上げていた。結婚して数か月は定時出勤定時帰宅が多かつたが、やがてそのパターンががらりと変わった。午前帰りが多くなつた。そうして朝帰りも目立つてきた。聞けばいつも顧客の接待とか、会議とか、同僚、部下との打ち合わせとかいろいろ理由をつけた。奈津子に不満はあつても、営業の忙しさは知つていた。だからそれ以上は問い詰めなかつた。

しかし、奈津子の不安が的中した。その間に夫は他の女性と付き合つていた。それを知つたのは夫の同僚からだつた。匿名の電話があつたのだ。電話の主は、絶対に電話があつたとは言わないでほしいと何度も言つた。奈津子はどうしていいか分からなかつた。電話してくれたのは、親切心からだと思つても、電話の主がにくかつた。夫婦間のことに他人から

手を突つ込まれたような思いがしたのだ。奈津子は夫を問い詰めた。

初めは、夫は白を切つた。外泊については、残業で帰れなかつたといつた。しかし奈津子が会社に問い合わせをしたところ、そういう残業は誰もしていないと言ふことだつた。夫にそのことを言ふと、夫はあつさり認めめた。そうして言つた。外泊については「一人きりになりたかつたのでビジネスホテルに泊まつた」と弁解した。信用できなかつたが、奈津子はそれ以上問い詰めることを避けた。教えてくれた同僚を配慮したからだつた。

父は運送会社では信用があつた。役職への誘いがあつた。役員がわざわざ家まで訪ねてきて説得した。奈津子はこの役員の来訪で始めて父に対して役職依頼があつてを知つたのだつた。奈津子は内心役職についてほしいと願つた。「私の父は某会社の部長だ」の方が、「私の父は運送会社で運転手をしている」というより自尊心が満たされるからだ。しかし、父は役職を辞退すると同時に会社を辞めた。

父が会社を退職したことで奈津子は再びショックを受けた。一つは今後の生活に影響が出ないのか、自分の進路が思うようにならないのではないか？ そんなことにくわえて、やはり父の社会的地位の低落が気になつた。職業に貴賤なしとは学校でもよく教師の口から出てきたが、現実はどうではないことは、生徒たちは百も承知だつた。その現実が目の前に突きつけられたとき、いらだたしい思いにとらわれた。しかし

頑固な父のことであり、どうしようもなかった。奈津子はふと思つた。「自分あまりにも世間体を気にしすぎているのではないか？」と。しかしどうしてもふつつきれなかった。

父は食品製造会社の運転手の職を見つけてきた。給料は前の会社よりは少し低いと言つた。このころになると奈津子は父の生き方を、一歩身を引いて見るようになっていた。父は真面目に働き給料は自分の小遣いを抜き取つた残りはずべて奈津子に手渡した。生活は決して豊かではなかったが、曲がりなりに安定していた。それは奈津子も遅しくなり、やりくり上手になっていたからでもあつた。奈津子はひそかに思つていた。父の生き方を反面教師として生きていこうと。

父は、三人の子供の社会への旅立ちを確認すると、待遇がいいからと言つて、自宅を出て大阪西成区に移り住んだ。それは敏弘が大学を卒業して一年後のことだつた。もちろん奈津子たちは反対した。しかし父はその忠告を聞き入れなかった。

父は自分だけの世界に一人で籠つて自分を見つめたかつたのだろう。そうだ、父にとつては家そのものが苦痛だつたのだ。母が家を出たことが、家にいづらくさせたのだろうと勝手に思つたことだつた。

四

奈津子は大阪の父のアパートを訪ねた。アパートというより簡易宿泊所といったほうがいい雰囲気だつた。父は仕事に出ていた。父が帰ってくるまで近くをぶらぶら散歩した。過

去には喧嘩や酔つ払いで問題があつた街だとは聞いていたが、今は平穩で平和な街に思われた。父が戻つてきたのは六時を過ぎていた。上下続きの仕事着のベルトには白いタオルが挟まれていた。父の体からは汗臭い匂いが立ち上つていた。

「なんだ？ 何かあつたのか？」

父は怪訝な表情をした。

「何も変わつたことはないよ。ただ、お父さんに会いに来ただけなのよ」

「そうか、それはうれしいけど、わざわざ来なくてもいいよ。行き帰りの旅費、だけでも馬鹿にならないぞ」

九階建てのビルの三階の一角に父は暮らしていた。六畳一間と二畳ほどの玄関兼炊事場が付いていた。部屋には鍋が三つと湯沸しが一つ机の上にぼつんと置かれていた。部屋の窓際の柵には壁に張り付くようにブラウン管のテレビが据えられていた。

「このテレビはね、このアパートが置いてくれてるんだ。退屈なときはよく見るよ。なんとなくね」

奈津子は頷いたが、そんなことはどうでもよかつた。

「お父さん帰つてこない？ 一人ではあれこれ不便でしょう？」

「別に不便じゃないよ。満足してるんだ」

「お父さん、本当？」

「ほんとだ。で、今日は何しに来たんだ。見学じゃなさそうだな。呼び戻しに来たのかね？」

「実は、そうなの」

「でも、この年だ、戻つても地元で就職できるかどうか分からないよ」

「敏弘だつて独り立ちしたんだから、そんなに収入を気にしなくてもいいじゃないの。お父さんさえ生活できればいいんだから」

「独り立ちしたんだから俺の父親としての義務は終わったんだ。父親がいる必要はないんだろう。俺も父親としては不十分ながら義務は果たしたと思つてゐるんだ」

「それは十分に分かつてるわよ。お父さんのおかげで、大学も卒業できたんだから。でも、お父さんに帰つてきてもらいたいの。一緒に暮らしたいのよ」

父は返事をしなかつた。酔つ払いなのだろうか。大きな喚き声が聞こえた。それは時間とともにかすれていった。

「山頭火が彷徨しているときは、こんな具合だつたんだらうなと思ふね。誰の視線も感じることなく無限の空間がある。俺は、自分の生活に責任を持つてゐる限り自分流の生き方をする権利があると思つてゐるんだ。近いうちに転居しようと思つてゐる。お前たちが願つてゐるやり方で私の世話をしようと思ふな。思つただけで息が詰まりそうだ」

その後問もなく、父は横浜に居を移した。会社の配置換えに従つたという箇条書き風の葉書を奈津子は受け取つた。しかし父は自分から望んだのだらうと思つた。やはり家系の放浪の遺伝子に支配されているのか？ 奈津子はふと思つた。

奈津子は親しい友人に父の生き様を話したことがある。友人は意外にも父の行き方に肯定的だつた。

「それつて仕方がないわね。幾分父親としては無責任のようだがするんだけど、でもお父さんは大方の義務は果たしてゐるんだと思うよ。だから戻つてきてほしいというあなたの気持ちとは分かるけど、やはり、自由にさせてやつた方がいいんじゃない？ 戻つてきて同居すれば、また問題が起きるわよ」

「それは私だつて覚悟してゐるつもりだけど」

「でも現実には厳しいのよ。例えば、お父さんつて、あなたの旦那さんとはまったく、血の繋がりはないんだからね。お互いに気を使いあつて生きることになるのよ。それつてお互いに気詰まりだと思ふよ。そんな気遣いに疲れ果てて、その反動で、旦那さんがまた浮気始めるわよ」

「一緒に住まなくてもいいのよ。近いところに住んでくれればいいのよ」

「それつて結局距離の問題だけじゃないの。今は交通も便利になつて、距離つてそれほど問題じゃないんじゃないの？ 大阪なら空の便なら一時間ほどじゃないの、新幹線だつて二時間ちよつとでしょ？ お父さんだつてそれを前提とした上での生き方してるんじゃないの？」

「でも距離は遠いわよ、父の健康のこと心配するのよ」

「お父さんから転居挨拶が来るんでしょ？」

「それは必ず教えてくれるわ」

「じゃあ、現状維持が一番いいわよ。そうして年に何度か手土産もつて行つたり、子供を連れて行つたりすればいいじゃないの。出費はかさむけどね。親孝行費用と思えば安いもの

じゃない？ 今は規制緩和と人口減を見込んで、飛行機や新幹線のチケットだつて結構安いのがあるわよ」

父が転居するたびに奈津子は父のアパートを訪ねた。兄はほとんど奈津子にまかせつきりだつた。奈津子は父のアパートを訪ねたあとに兄に報告した。兄は男だからなのか、父の放浪癖にはそれほど心配はしていなかった。

「元氣なんだね。じゃあひと安心だな。女じゃないからあまり心配する必要はないよ」

兄はあつけないくらい淡泊だつた。

「でも急にお父さんが倒れたときのことが心配なのよ」

「人間つて誰でもいつかは死ぬんだよ。親父の死に目に会えない可能性はあるけどね。親父さんに言つておいてくれよ。病氣になつたらすぐに知らせてほしいとね」

奈津子はふと思つた。兄も父の性質を受け継いでいるのではないだろうか。兄だつて、将来父のようにならないとも限らないのではないか。つまり父の生き方に共感している。今は家庭のしがらみで定住しているに過ぎないのではないだろうか。そうしてまた思つた。父の遺伝子は何も兄だけが受け継いでいるのではない、自分だつてもらつてゐるんだ。父の遺伝子によつて自分は存在しているのだ。自分の体の中にも父の放浪癖の遺伝子がしっかりと食い込んでゐる。奈津子は父を迎えに行つたことが、理に反することのように思われた。

五.

父から横浜の寿町に転居したという葉書を受け取つてから

二月ほどして、奈津子は父を訪ねた。大阪と同じようにビルの一室を借りて生活をしてゐた。大阪と違つて周辺にほとんど商店、飲食店がなかつた。二、三軒、飲み屋風の看板がビルの入り口に表示されてゐるのを見ただけだつた。

「大阪と建物は同じだけど周囲の雰囲気はぜんぜん違ふわね」

「こつちの方が閑静だ。アパート代はこちらの方が四十%ほど高いね」

「東京に近いから？」

「多分そうだろうね。俺つて娘の監視つき生活をしているんだな」

「嫌味なこと言わないでよ。心配だから来たのよ」

「どなたところに住んでゐるかつて調査に来たんだな」

「まあ、ひどいわね。一目お父さんの新生活を見ておかないとね。お兄ちゃんからも敏弘からも頼まれたのよ」

「三人の子供の監視つきかね。何か自由を奪われたような気がするね」

「別に監視じゃないよ。お父さんの健康が心配なのよ。それ以外何も無いの。いろいろ注文はつけてないでしょ、お父さんは自由なのよ。でも内心は少ししんどいんだけど」

「何がしんどいんだ？ 来なくていいのに、お前が来るから俺までしんどいんだよ」

「物理的な、身体的なしんどさじゃないのよ。精神的負担があるのよ。子供としてね」

「そんなに気を使わなくても結構だよ。お前たちが心配しな

いようにちゃんと連絡してらるじゃないか。お前は自分のことをもつと心配する必要があるんじゃないのかね？」

父は暗に奈津子の夫の浮気でいろいろあつたことを指摘して言っているのだ。

「そんなこと言わないでよ。もう解決したんだから。彼にはお父さんのような生き方はしてほしくないわ」

「俺もそう願っているよ、奈津子の幸福のためにね」

「お父さんって、そんなこと言って。じゃあお父さんも、研究所を辞めなければよかったのよ。どうして運送会社の仕事に転職したの？」

奈津子は思わず言つてはならないことを言つてしまつたよな思いにとらわれた。父も会社を辞めたことについては触れられるのを嫌つていたのだ。だから誰もが触れないようにしていたのだ。いわば父のサンクチャリーだったのだ。

奈津子は父の顔を見た。父は深いため息を付くと、小さな窓越しに曇り空を見つめながら、過去を辿るような表情をした。「いつかはお前たちから問われると思つていただけど、そのときがきたのかな」

父は奈津子の方に顔を向けることなく呟くように言つた。

「俺はね、試験管を持つて朝から晩まで実験室での生活がいやになつたんだ。だつて、そうだろう、実験室で白衣に着替えて、夜遅くまで実験に明け暮れる。実験室と自宅とを往復して人生が終わる、それがたまらなく嫌になつたんだ。いたい生きるつて何なんだ？ つて思つたんだ」

「でも、自然科学系の人つて研究所に入れば、誰だつて実験

室と自宅を往来することになるんでしょ？」

「そうだよ、それがノーマルなんだよ」

「じゃあ、お父さんだつて特別に例外的な生活を強いられつてことじゃないんじゃないの？」

「そうだね、そういわれると反論しようがないんだが・・・」

「大学だつて希望して自然科学系にすんだんでしょ？」

「それは事実だよ、高校でも化学や物理が得意だつたし、数学も好きだつたからね。だから生命化学を勉強しようとして農学部に入ったんだけどね」

「じゃあ、会社の研究室に入つてから、自分の生き方に疑問を持つたの？」

「それ以前からだね。自分の人生に疑問を持つて生きている人つてたくさんいると思うんだ。俺もそのワン・オブ・ゼムなんだ」

「お父さんは、いつも自分の人生に疑問を抱きながら、というより自分の進路に疑問を抱きながら学生時代を送つたということなの？」

「それはそういえるね。誰だつてそうだと思うよ」

「おまけに、お父さんは大学院まで行つたのよ。心は宙ぶらりんのまま大学院に進学するなんて、何か主体性がかけているような気がするんだけど」

「お前は敵しいんだな」

「別に責めてるわけじゃないのよ。もう会社を辞めて時間が相当過ぎていりし、少しは話してくれてもいいのかなと思つ

ているのよ。私だってお父さんの生きざまを知れば、お父さんに対する見方も今までとは変わるかもしれないし、また私の今後の生き方にも参考になると思うの」

「そうか、お前の人生にも参考になるのかね。変な理由付けだな」

「だつてそうじゃないの。お父さんも知つての通り、私だつていろいろ家庭内の問題を抱えて生きてるんだから」

「俺も、転職しても時々俺の人生はこれでいいのかつて、思いながら生きてきたよ。自省もしてきたんだ。でもやはりこれ以外の行き方はないと思つてるんだ」

父の表情が少し厳しくなつた。自分の主張を忌憚なく言つてゐるということをうかがわせた。

「お父さんの生き方を見てみると、迷いながらの人生であつたことは分かるのよ。これつて、お父さんが言うように誰でも同じことなんだろうけど。でも迷いながらそのまま踏みとどまつて生きてゐる人の方が多いいんじゃない？」

「それは俺もそう思うよ」

「じゃあ、お父さんの転職の決断をさせた、その限界の閾値を超えさせた原因は何なの？」

「そんなに大げさなもんじゃないんだ。仮にその原因がなくても、いずれは他の原因で閾値を凌ぐことになつたはずなんだ。個々の因子はそれほど問題じゃないんだよ」

「でも、お父さんの人生はそのわずかな原因によつて忍耐の閾値をオーバーして大変換したんでしょ？ だから、そんなに簡単に無視できないと思うんだけど・・・」

「そう言えないこともないけどね」

「それつてどんなことだつたの？」

「そうだなあ、即座に言えと言われてもね」

「でも会社の研究所を辞める理由にはつきりと認識してたんでしょ？」

「それはね、当然だよ。まあ思い出せば、その一つは、俺の係累には自由人が多かつたということだね」

「それつておじいちゃんの係累のこと？」

「そうだ、その通りだよ。例えばT大を卒業して、キャリアとして農林省と外務省に入省した二人の叔父はね、時期は違つていたけどね、やはり二人とも中途退職して民間会社に就職したんだ。本人たちは会社から誘いがあつたということだつたけどね。酒が入ると、官庁は自由がないと言つていたよ。公務員の特別権力関係は人権侵害も甚だしいとも言つていたね。冗談めかしてはいたけどね」

「特別権力関係つて、国家が優先するのは当然だから仕方がないと思うけど。そんなことは分かり切つていたことだから、それがいやなら初めから公務員を志望しなければよかつたのよ」

「それはお前の言うとおりでだな」

「官庁を辞めたことには、全然後悔してなかつたの？」

「いや、官僚として務めていた方がよかつたのかな、というのを聞いたこともあるね」

「二人とも相当迷つた末に辞職したのよ、きつと」

「いやに確信的だな。そういえば看護師になつた叔母もそう

「だな、この人の生活もまた自由奔放だったね。人の噂も叔母に対してはかなり批判的だったようだけどね」

「どんなに自由奔放だったの？」

「そうだね、総婦長を務めたりしているから、それなりの信用はあったんだけどね。でも、あの時代にね、いろいろ恋愛したり別れたりした人だよ。最後は孤独な死に方をしたんだけどね」

「そんなに自由だったの？」

「そうだね。医者と恋愛して結婚したんだけど、二子を残して自分から別れたんだ。それが一件落着くと、今度は実業人と恋愛してね、女の子もできたんだけど、また子供を置いて家を出たんだよ。この人にはまだまだ他にも恋愛については武勇伝のようなものがあるんだ」

「そう言いながら、父はそれ以上触れようとしなかった。奈津子は同性として、もつとその叔母の生きざまを聞いて見たかったが、父の表情に話す意思が見られないことを見とつて話を進めた。恋愛についての武勇伝と聞いて、奈津子はふと東電の殺人事件のY女が頭に浮かんだ。Y女は性産業におぼれて転落していったが、この叔母は恋多き女にとどまったのだろうと思った。

「その叔母さんのお葬式は、子供さんがしたの？」

「そうだよ。」

「じゃあ最後はそれほど、孤独だったとは言えないじゃないの」

「まあ、見方によるね。でも子供からは時たま手紙が来る程

度で、母親に会いに来ることは年に一度あるかないかだったって身内のものが言っていたね。叔母は自分の子供からも恨まれていたんじゃないかなあ。こんな具合で、とにかく俺の家系には自由人が多かったということは事実なんだ」

「でも、その叔母の方って、手紙は時々もらっていたりしてたつてことは、意外とお子さんたちとは強いつながりがあったんじゃないかと思うんだけど」

「周囲のものが、女の一人暮らしはわびしそうだつて、叔母の暮らしを見て言つてたのがいた」

「じゃあ、お父さんは私たち子供との関係はどうなのよ？」

「父は奈津子をじつと見つめて考えるような素振りをした。

「そうでしょう？ そんなに疎遠じゃないつてことじゃない？」

「父は苦笑いしながら言つた。

「そうだな、俺たちは疎遠じゃないよな」

「叔母さんつていう人も一人のほう暮らしやすかつただけなのよ」奈津子は続けて言つた「そんな自由への志向性つてもともと潜在的に存在していたと思うのよ。つまり初めから分かつていた事実なんだから」

「そうとも言えるけどね。やはり女の一人暮らしはね。傍から見るとわびしいと思うぞ」

「本人は意外と充実した人生じゃなかつたの？」

「叔母に聞いたことがないから何とも言えないね」

「じゃあ、もう一度聞くけど、お父さんは高校時代から文系の科目は苦手だったの？」

「そんなに悪いと思ったことはないね。特に不得意な科目はなかったしね。文系・理系両刀使いだっつたと言ったほうがいいのかな」

「じゃあ、やはり高校の段階で立ち止まって、自分をしっかりと検証して、進路を決めるべきだったと思うんだけど」

「そりゃあ、俺だつて考えたよ。考えた末に係累の遺伝的要素も浮かんできたんだ」

「でも、自分の係累の遺伝的要素によって自分の人生を決めるって、主体性がないような気がするんだけど」

「そういう風にも考えられるけどね。でも、誰だつて自分の係累のDNAは考えるはずだよ。ほとんどが文系にしか進学していないとか、理系の傾向が強いとかね。お前だつてそうじゃないのかね？」

奈津子は父の口から出たDNAという語句を聞いて、ダーウィンが頭に浮かんだ。ダーウィンは決定論の忠実な信奉者ではなかったのか？ という思いが頭をかすめた。彼はクリスチャンだった。キリスト教を嫌悪したが、無神論者になつたわけでもないし改宗したわけでもない。彼は悩み続けて一生を終わっているのだ。生きた空間は違つてもその軌跡は父と同じではないのか？ そんな思いがふと頭をかすめた。

「それはお父さんの言うとおりだわ。でもお父さんほど係累のDNAを決定論として受け入れた人間はいないと思うの」

「俺だつてそんなに係累のDNAばかりを重視したわけじゃないんだ。でも、重要な一因子ではあることは言えるね。だから切り捨てられるものじゃないんだ。確率論の領域に入る

んだと思うけどね」

「お父さんは、結局遺伝的要素つまりDNAにだけ忠実に従つたということなのよ」

「それだけじゃないぞ。環境的なものにも影響を受けたんだ」

「それってどんなこと？」

「学会で知り合つたんだけどね、気が合つて、親しく付き合つていたんだ。三年先輩でね」

「同じ研究所の人だったの？」

「いや彼はね、T大の自然科学系の大学院を出て、大学に残つて助教をしていたんだ」

「その人が・・・」

「うん、突然大学を辞めたんだ」

「お父さんに大学を辞めると言ったの？」

「うん、辞める前にお父さんに会いに来たんだ」

「その辞めたい理由は何なの？」

「お父さんも、話を聞いて、びっくりしたよ。前途洋々たる人だったからね」

「どんな相談を受けたの？」

「相談だと言つていたけど、辞める覚悟をして会いに来たんだね」

「じゃあお父さんは、その人にどんなアドバイスをしたの？」

「アドバイスなんかできなかったよ。年上だし、もう辞めるだつて決めていたんだし・・・。それに、俺だつて迷える子羊だ

「つたんだからね」

「その人と話してお父さんはどう思ったの？」

「それは驚いたよ。学会で会つても、やる気満々だったし、会員の間でも評価は高かったよ。指導教授と共同研究でよく学会で発表していたからね」

「じゃあ、何が不満だったのかしらね」

「視野狭窄になりそうで、このまま一生を終わるのかと思うと怖いと、言っていたね。そのあたりは俺の思いと同じじゃなかったのかな」

「ドクター・コースを出て、自分の出身大学に就職して、指導教授の信頼も得てたんでしょ？」

「そうだよ、将来は教授の地位が約束されていたんだ」

「それがどうして狭い空間なの？ 将来は無限の空間があると思うんだけど」

「それは、具体的に話には出てこなかったね。無限の空間があるとお前は言うけど、所詮はトンネルを走り続けることなんだよ。前方を見れば無限大と言えるけどね。社会との幅広いコミュニケーションはないんだ」

「でも専門性とはそれが普通だし、私生活の領域も持っているんだし……。その私生活の領域では社会的生活を営んでいるんだから、そんなに狭い空間じゃないと思うんだけど」

「でも、理想はそうかもしれないけど、現実には、こんな人生でいいのか？ という疑念はほとんどの理系の人間は抱いていると思うんだ」

「じゃあ一般の会社員のほうが、その空間が広がってこと」

「そうだと思うね」

「その人は大学を辞めて何を始めたの？」

「二年ほど浪人して司法試験に合格したよ」

「じゃあその人って今は弁護士なのね」

「そうだ。特に下層階級の人々のために頑張っているね」

奈津子は弁護士と聞いてその人の生き方が納得できた。社会のいろんな分野で活躍している姿が思い浮かんだ。弁護士の生活からトンネルを想像することはできなかった。父の言う狭い空間が理解できるような気がした。じゃあ、父はどうなんだ？ 父だってそれなりの才能はあったのだから、ほかに父の居場所、生活の場所はあったのではないのか？ 父の適した空間が。

父が運転手という肉体労働による生活空間の拡大を求めたことには、奈津子はやはり理解できない部分があった。奈津子はそれを思うと、苛立ちを感じた。何も運転手という肉体労働に身を置かなくてもよかったのではないのか？ 大学院まで出ていながら、その知識を全く生かせない世界に飛び込んでいった父。そんな思いがぐるぐる頭の中を回転した。

父は奈津子の動揺を読み取ってそれとなく話をそらした。奈津子もそれ以上聞くことに意欲をそがれた。

でも、父が最初に遺伝的因子を持ち出したのは意外だった。本当はこの先輩の生きざまの方が、父の転職を促した重要な因子ではなかったのか？ という思いがした。

確かに周囲を見れば、特に父や母の性格なり素質を受け継いでいるのだから、子供の運命も幾分かは決定付けられている

ることは間違いない。

奈津子が進路を決める場合も、父と母を思い浮かべたことは幾度もあった。父は理系だ、じゃあ私はどうなんだ？ 母は文系だ、じゃあ私も文系の遺伝子を受けついだのか？

など特に大学進学では、いく度か模索したことがある。だから進路決定の一因子であったことは間違いない。

しかしそれだけではないのだ。その因子はあったとしてもほんのわずかでしかなかったと思う。自分の希望と性格、教科の得意・不得意、社会参加への意欲などを総合的に考慮して進学した。

その結果自分はどういう人生を辿ったのか？ 迷いはなかったのか？ 奈津子は思う、現実の生活ではあれこれと迷い試行錯誤の連続だったが、父のような混乱はなかったと思う。文系の国文科をでて、卒業時、教職につくか民間会社に行くか迷ったことがあったが、自分は人を教えるような性格でないし、知識の持ち合わせもないと判断して民間会社に就職した。その過程で遺伝的要素など考えたことはなかった。

父は「神はサイコロを振らない」と言いたかったのか？ 奈津子は思った。あの閾値を越えさせた因子は何なのか？

奈津子は依然として父の生き方には納得できなかった。係累のDNAより、周囲の人々の影響が大きかったのではないのだろうか。他にも人生観を変えた因子があるのではないのか。奈津子はそんな思いがしてならなかった。いつかまた機会を見つけて、もう一度父に尋ねてみようと思った。そう思いながら、時間は過ぎていったのだった。

六.

父の友人Yという人から手紙を受け取ったのは、翌年の秋だった。簡単に「あなたのお父さんは今入院している。お父さんからは、すぐに回復するから、連絡してくれるなど止められたが、病状が不安なので手紙を出した」と簡条書き風にまとめられていた。奈津子は家のことを夫に頼み、横浜に向かった。

父は転居していた。その転居の知らせはまだ奈津子には届いていなかった。奈津子は一瞬途方に暮れたが、もらった手紙の差出人の住所を頼りにYのアパートを訪ねた。Yの住所はやはり父と同じ寿町で数十メートル離れたところにあるビルの五階だった。薄暗い階段を上がった。エレベーターはあったが、ビル全体に陰気さが漂っていて、なんとなくはばかられた。ベルを押すと七十歳前後と見られる老人が顔を出した。奈津子が身分を名乗ると、「私があなたに手紙を出したYだ」と言った。白髪のやや背が高く、仕事着を着た静かなタイプの老人だった。奈津子はほっとした。内心、いかつい、あらっっぽい男性を想像していたのだ。Yは自分の部屋を振り返りながら言った。

「ここではなんだから、隣の公園にでも行きましょうか」

奈津子は頷いた。ビルの向かい側が公園だった。その南側は高架橋になっていて、時々電車が行き来した。公園には常緑樹が生い茂り、その電車の喧騒を吸収していた。Yは白色の色あせたベンチに持参した新聞紙を広げると、奈津子に座

るように指さした。Yは奈津子が座つたのを見届けると傍に座つた。

「実は手紙に書いていたように、花田さんからは、絶対に連絡するなって言われていたんですが、容態がよくないものだから、手紙を出したんですよ」

「花田さんって父のことですか？」

「そうですよ、あれっ、偽名ですか？」

「そうです。本当は新垣って言うんです」

「そうですか、少し驚きましたね。花田って姓は使い慣れた感じでしたよ」

「そうですか？」

「じゃあ昔から使ってたんだな。そうでないとあんなにスムーズには口から出てきませんね。でもね、ここでは偽名を通してにいる人が多いんですよ」

「そんなに多いんですか？」

「そうですね。誰だつて身元は知られたくないですから。私だつてそうですよ」

「じゃああなたのお名前も偽名？」

「実はそうです。花田さんと私とは気が合ってますね、親友とまでは行かないけども親しい付き合いをしてるんです」

「父は入院してるんですか？」

「そうですよ」

「どこの病院ですか？」

「あの高架橋の向こうにある病院ですよ。一緒に行つてあげますよ」

「じゃあ、お願いします」

Yはズボンのほころいを払つて立ち上がった。奈津子はふとこの人物に疑問を持った。はじめは単なる老人としか思えなかった。しかし彼の雰囲気には単なる老人ではない何かがあった。第一、話し方が労働者とは違った。そうして思い出す、手紙の達筆な一字一句を。奈津子はこの老人にほつと安心を覚えた。

「この寿町は肉体労働者の住居なんですよ。あそこに大きなビルがあるでしょう」

彼は振り返るとひよろ長いビルを指差した。それは十階建てのビルだった。

「あのビルがアパートになつてるんですよ。あなたのお父さんも、あのビルに住んでいるんですよ」

「父は転居すると必ず連絡してきましたんですが、今回は何も連絡がなかったんですよ」

「じゃあ、転居して間もないからですよ。転居してきたのが二週間ほど前ですからね。落ち着いてから出そうと思つていたんですよ」

Yは父をかばうように言った。

「じゃあ入院してまだ日が浅いんですね」

「そうです、転居してきて数日後ですから。実は転居する前から体がよくなかつたんですよ。診てもらおうように勧めていたんですがね」

ガードを潜り抜けると、狭い一本道路があつた。その先に六階建ての病院が見えた。「K社会医療センター」という看

板が目に入った。

「あの病院が我々の命の頼りなんです。我々のほとんどがお世話になっていきますね。病院も親切ですよ。医師も看護師もね、社会の下層階級の世話をしている病院ということを知った上で勤めているんですよ。我々も、理解してくれる医者がいられると話しやすいし相談しやすいですからね」

Yは玄関の受付の女性を見つけると、「こんにちは、今日も元氣だね」と声をかけた。

「あらYさん、今日はどこが悪いの？」

「いえね、今日のご息女を案内してきたんだよ。ほら、花田さんだよ、彼の娘さんなんだ」

「あら、あの人の娘さん？ あの人は今はいびんびんしてますよ」

彼女は奈津子を見ると少しおどけたようにして言った。

五〇八号室にはいると、父は六人部屋の窓際のベッドに伏せていた。

「お父さん、どうしたの？ 連絡もしてくれないで」

父はびっくりしたように起き上がった。一瞬、ぼかんとしていたが、

「どうしてお前が、ここに？」

Yが答えた。

「実は、私が連絡したんだよ、余計なお節介をしてごめん。でも心配だったんだ。いつもとは違って、不吉な感じがしたからね」

「何だ、あなたか。しょうがないな。あれだけ言っておいた

のに」

「でも見て見ぬ振りにはできないよ。俺の性分としてはね」

「連絡するつもりだったんだよ、でも転居したばかりだったからね。遅れちゃったんだ」

父は奈津子に向かって弁解がましくいった。

「じゃあ、俺は失礼するよ。まあゆくりり養生することだね」

「ありがとう、おせっかい屋さん」

父は皮肉つばい表情でYに声をかけた。二人の間には友情のようなものが感じられた。

「お父さん、どこが悪いの？」

「いや、どこかといってね、ただ少し眩暈がしてね。それが続くものだから、入院したんだ。Yさんが勧めるもんだからね」

「よくなったの？」

「うん、今はなんともないよ。明日か、明後日退院しようと思っていたところなんだ」

「今の人、お父さんのお友達？」

「そうだよ、いい人なんだ。みんなから慕われているんだ。法律にも詳しいんだよ。ここらあたりの人間はみんなお世話になっているよ」

「どうして？ そんなに詳しいの？」

奈津子は生活の場所に似合わない人物のような気がして尋ねた。

「さあね、知らないよ、聞きもしないしね。あまり身元調べ

「ここでは禁物なんだ」

「じゃあお父さんも、Yさんには過去のことは何も話してないの？」

「そうさ、話す必要もないしね。また話したくもないしね。誰も聞く人もいないよ」

「じゃあYさんも自分の過去は話さないの？」

「そうだよ、各自に占有空間があつて、お互いに侵さないつていう不文律があるんだ」

「変な人が多いのね」

「ここに住んでいる人つてみんな変な人だよ」

奈津子は主治医と会つた。

「今のところ、風邪の傾向も見られず、血液検査も若干血糖値が高いのと、前立腺炎のPSAが少し高めですね。でもいづれも年齢から来るものですから、現在は問題ない値です」

奈津子はほつとした。

「でも未検査の部分がありますから、それ以上はなんともいえませんね」

父が帰郷を承諾したのは、奈津子の説得もあつたが、自分も年をとり、このままでは子供に迷惑が掛かると思つたからだろう。それと、もう一つ、会社は定年で退職して、派遣社員のような不安定な状態になつていて、将来見通せなかつたこともあるはずだ。どこの会社も高齢者には車の運転はさせなかつた。このことは父も十分に知つていたはずだ。だから奈津子の願いを素直に聞き入れたのだろう。

奈津子としては父を家に迎え入れたかつたが、父は独りが

気楽だといつて拒否した。奈津子もそれ以上は勧めなかつた。四DKのアパートでは、同居は実際に無理だつたのだ。

父は奈津子の家の隣の町にアパートを借りた。父の体調はよくなかつた。しかし父は、まだ働きたいといつて、時々ハローワークに出かけた。やがてまた体調を悪化させ、近くの病院に入院した。自覚症状は眩暈がしてよくなるらないということだつた。診察をした内科医はすぐに父を脳外科に回した。

七.

父は自分の病が脳腫瘍と知つて、少し動揺したが、その後は平静を維持した。それほど自己欺瞞をしているとは思われなかつた。医者は抗がん剤や放射線による治療を勧めた。しかし父はすべてを断つた。医者はまだあきらめるべきではないと言つたが父は肯んじなかつた。奈津子も兄と一緒に治療を受けるように勧めた。しかし父の意思は変わることはなかつた。「もう十分生きた。現世に未練がないとは言わないが、ここらあたりで十分だ」

「お父さん、お父さんは一人じゃないのよ。私たち家族もいるのよ。私たちは一日でも長生きしてほしいのよ。それが家族じゃないの？」

「それは分かっている。しかしガンは治らないよ。いろいろ資料を調べたんだ」

「でも先生は治癒の可能性があると言つてるのよ。治療を受けたらいいじゃないの？」

父はかすかに苦笑して、目をそらした。

父は帰郷して七ヶ月生きてた。その間対処療法しかしなかった。主治医は時々奈津子や兄に対して「人間は最後まで生き抜くことが義務付けられている。それを放棄することは神の意思に反する」と言った。クリスチャンだったのだろう。熱心に治療を勧めた。しかし、父は主治医の勧めを頑として断った。主治医もそれ以上は干渉しなかった。

父の最後は静穏だった。食事がのどを通らなくなり日に日にやせ衰えていった。苦痛を訴えることはほとんどなかった。痛みがくると主治医はモルヒネを使った。モルヒネはよく効いた。

父と対話したのは死亡する八日前だった。父は奈津子の顔を見ながら、「こういう生き方もあるんだ」と言っただけで笑んだ。その表情には満足感が現れていた。

亡くなった父が残したものは三通の貯金通帳だけといってよかった。四百万円ほどが記されていた。日雇いのトラック運転手の仕事では、もう給料もたかの知れた額でしかなかったはずだ。酒も飲まず、賭け事もしない父だったから、少しずつ貯金したのだろう。「俺の葬儀はこれで頼む」と言っているようだった。

奈津子には、どうしても父の生き方が理解できなかった。

自分の子供にはこんな人生は送ってほしくなかった。父の遺体を整えながら父の一生は反面教育の好事例のように思えた。

八、

父の一生を考えると、あまりにも落差が大きかったと思う。

父が亡くなったときも、奈津子の気持ちには、父の人生は、ほんの一部は理解できてもそのほとんどが闇と言っただけだった。父は何を避け続けていたのか？何を求めていたのか？という疑念が消えなかった。お通夜の夜、父の遺体を見つめながら、奈津子は何度も問いかけた。父は何も答えてくれなかった。物理的なその表情は答えを拒否していた。

しかし今は違う。父の生き方がかなり理解できるようになっていた。父の墓参りに行くたびに次第に父への恋しさが増してきていた。普通であれば時間とともに記憶は薄れていくのに、奈津子は違っていた。父の生涯が乱雑さの極にあったのが、次第に収斂しベクトル化し始めていた。奈津子は予想していた、いつの日か父の生涯は飛行機雲に変じらるだろうと。父が暮らしていた大阪の西成区のアパート、横浜寿町のうらぶれた下宿部屋も父の生涯をしっかりと支えていた。そして父との調和を取り戻しつつあった。

奈津子のこの心のシフトは、あの東電OL殺人事件のY女の生きざま、カナダのオーロラの舞う雪原に去ったA女の自殺行も原因している。

奈津子はY女にはどうしても共感するところがなかった。

エリート両親の元に生まれ、一流大学を卒業して一流の企業に就職。どこにも不満があるのか？セックス産業へと身をもち崩したY女。まさに転落としか言いようがない、と思っただ。奈津子から見れば自業自得以外何物でもなかった。

ところが、あるきっかけで、Y女が学会へ出した研究レポートを手にした。表題は『家庭〇〇XXの変化』だった。研

究資料としては、調査資料がグラフなどを多く使っていてねいに分かりやすく書かれていた。

奈津子はその内容に驚いたのではない。その解説文を読んだ、今までのY女に対する評価が誤りだったことを悟ったのだ。文章から浮かんでくる彼女の実像は奈津子が抱いていたものとは全く異なっていた。彼女の性格は素直で純粹だった。Y女に穢れや墮落は全く見られなかった。論文の文章が身の潔白を切々と訴えていた。

「もし自分が夫からさらに裏切られた場合、その補償は沈黙するだけで可能なのか？」奈津子にはY女が自分と二重になつて迫ってくるのを避けることができなかつた。それは父の姿が変わつた。そうだ、父とY女は同じ道を辿つていたので。Y女も自分の空間を必死で求めていたので。彼女が苦しみのあまり性産業に身を置いたことも同性であることから、時を経るうちに許容できるようになつた。

それからY女の事件から十数年後の二〇一四年、女医のA女がオーロラを慕つて自殺行をしたことを新聞で読んだ。奈津子は、悲しいばかりの詩的情景を思い浮かべた。緯度の高いカナダの雪原を、天空に舞い散るオーロラを仰ぎ見ながら歩き去るA女の姿を思い浮かべたとき、体が震えるような感動を受けた。しかし次の瞬間、一つの命が消え去ろうとしているのだと知って、思考が錯乱した。その動揺のなかで、奈津子は「戻つておいでよ、戻ってくるのよ、生きるのよ、生きるのよ」とつぶやいている自分を知つた。彼女に父がオーロラをラップしたのだ。父は生き抜いたといつていい。しかし

父も生死の間をさまよい続けていたのだ。いつ死んでもおかしくはなかつたのだという思いがした。

ダーウィンだつてそうだ。キリスト教から回避しながら逃げおおせなかつた。彼も自分の人生を真剣に考えながら一生を終えたのだ。それは父の苦しみと全く同じに思われた。

*

*

奈津子は、弟の背中を見ながら山道を降りた。気温は少し上がったようだ。頬を掠る風も快かつた。メモリアル・パークのパーキング・エリアに車が十数台並んでいた。奈津子の車がひとときむ目立って見えた。それほど高級車ではなかつたが、つい最近買った車だけに、車体の色が際立って見えた。

敏弘が言つた

「お父さんもいろいろ悩みぬいて自分の人生を辿つたんだろうね」

「あなたもお父さんの血を引いているから、お父さんのような人生を送るかもしれないよ」

「それって俺は覚悟してるよ。お父さんのようにたくましく生きてやるんだ」

奈津子はそれを聞いて心が安らぐのを感じた。弟も父の人生を認めていることが分かつたからだ。

山手から爽やかな風が二人を包んだ。二人はその風に身を任せて立ち尽くしていた。